

## 特集：「新しい日常」における公教育の在り方

### —教育における「隔たり」と「繋がり」を再考する—

2020年の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大は、世界中に大きな混乱と影響を与え、深刻な社会問題を生じさせている。「コロナ禍」は、私たちの社会生活と価値観を大きく変容させ、「新しい日常」への移行を要請した。マスク着用と Social Distancing（社会的距離をとること）が求められ、私たちのコミュニケーションの質と量、社会的な関係の維持・構築の方法にも大きな変化が生じている。このような「新しい日常」下では、密閉・密集・密接などの状態を避けて「隔たり」を確保・維持するよう求められている。その反面、人々の「繋がり」への希求と動機は、より明確で、より強いものになっている。

教育においても例外ではない。「コロナ禍」は、世界中で社会的・経済的問題を深刻化させ、人々の移動や接触を制限し、人々の孤立化と格差拡大を助長した。このような事態は、世界中で学校教育を動揺させ、その根源的な問い直しを迫る状況をもたらしている。一方で、私たちの生活や仕事の空間は、急速にオンライン世界に拡大している。オンラインの様々なツールを有効に活用すれば、移動が制限される中でも、日本中・世界中の人々と同時に繋がることができる。休校や学校閉鎖などが一つの契機となり、学校空間や教育空間のオンライン化もまた世界中で急速に進められている。今後、オンライン空間での学びは、加速度的に進んでいくことが予想される。

このような状況にあって、今まさに、これからの社会を創る子どもたちの教育に責任をもつための学校教育の在り方を問い直す時機となっている。そして、現代社会を支える多様な世代の生涯学習を保障する公教育の姿を描き直し、再構築していくことが必要である。本特集では、教育学の様々な立場・領域から、すべての人々に開かれた教育の在り方について理論的・実践的に問い直し、「隔たり」を乗り越える「繋がり」の観点から、「新しい日常」における公教育のあり方を探っていききたい。

#### 【テーマ例】

1. 「学校教育」の根源的な問い直し
  - ・ 近代社会を支えるべく設計・構築されてきた「近代教育」や「近代学校教育」の再考
  - ・ 通学と集団的一斉対面授業を前提としてきた学校教育制度の問い直し
  - ・ 教育・学習の「場」「機会」「形態」の多様化・複数化
  - ・ ICT等を活用した新たな教育方法と学習環境の提案
  - ・ 「新しい日常」における学校教育を支える教員の研修や労働について
  - ・ 大学教育におけるオンライン授業の可能性と課題
2. 多様な学習機会のオンライン世界への拡大
  - ・ 教育・学習機会のオンライン化の可能性と課題
  - ・ 通信教育・遠隔教育のこれまでとこれから
  - ・ （身体的・精神的な理由で）学校に通えない子どもたちへの教育保障
3. コロナ禍により顕在化・深刻化した社会問題と公教育の課題
  - ・ 貧困家庭の子どもへの教育的・福祉的支援
  - ・ 高齢者におけるデジタルデバイド問題と生涯学習の可能性
  - ・ 教育分野での緊急時対応の課題と意思決定プロセス

締切：2021年7月30日（金）必着

送付先：日本教育学会機関誌編集委員会

〒101-0041 東京都千代田区神田須田町2-15-2 クレアル神田102

\*投稿にあたっては、最新の「投稿要領」を参照のうえ、封筒の表に「特集：『新しい日常』  
における公教育の在り方」と朱書きすること。